慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	斯道文庫蔵『翰林辞』解題と翻刻
Sub Title	An annotated transcription of Kanrin-ji housed in Shido-bunko
Author	堀川, 貴司(Horikawa, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2026
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.60 (2025.) ,p.101- 127
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20250000-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯道文庫蔵『翰林辞』解題と翻刻

堀川　貴司

本書は、『作文大体』の一伝本と見られるものであるが、書名を含め増補改編が甚だしく、中世における同書の受容を知る上で興味深い内容を含んだものである。

簡略に書誌を掲げる。

翰林辞一九巻　　和大一冊　　919
　　ト230
　　1

闕名者撰

寛文一二年（一六七二）一二月写（杲快）転写五条為庸筆本

東寺観智院旧蔵

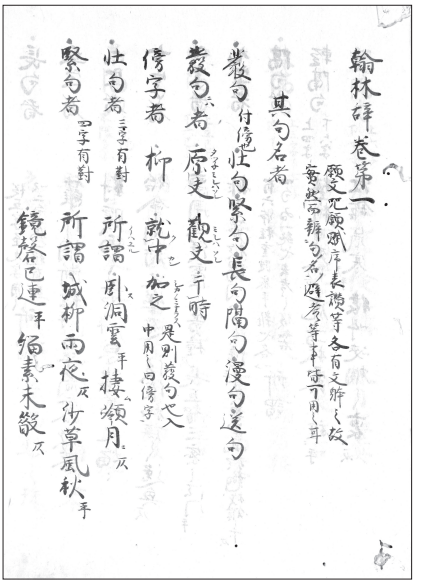
原縹色無地表紙（二七・五×二〇・五糎）、五つ目綴。原左肩無辺題簽に墨書「翰林辞」（本文と同筆）。右下に墨書識語「観智院」。前後遊紙各一丁。無辺無界九行二三字前後、注小字双行、墨返点・送仮名・竪点、朱合点。字高二二・八糎、字幅一六・八糎。

巻一首「翰林辞巻第一」とある他は、巻首巻数のみ。巻尾は巻四まで巻数のみ記すが、「巻第一終　巻第二」の如く巻尾題に続けて同行に次巻の巻首題を記す。巻五以下は巻首題のみ。墨付全三〇丁。

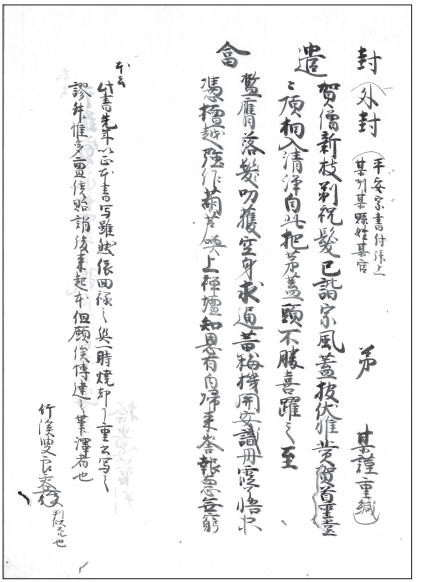
一一ウ冒頭（巻十末）本奥書Ａ：

本云、得度転之説本、致推量之罵切。於愚儒之舛誤、侯君子之添削耳。

三〇オ末本奥書Ｂ



巻首



巻尾および本奥書B

〈本云〉／此書先年以正本書写、雖然依回禄之災、一時焼却了、重書写之。／謬舛惟多、亶侯貽誚。後来起本、但願俟博達之筆沢者也。／竹渓叟良容（花押）〈判似スル也〉

三〇ウ冒頭本奥書C：

〈本云〉／于茲寛永十四年臘月　日書写畢／拾遺菅判

裏見返書写奥書：

寛文十二〈壬子〉年五月廿三日以五条黄門為庸卿／　所持本馳筆了／〈同廿五日一校了／八月七日二交了〉／権大僧都杲快

Aの「説」は「証」の、Bの「起本」は「起者」の誤写か。Aの記述からは、本書の親本あるいはその前段階で、転写の過程に起こる誤脱が多かったことがわかる。

Bの「竹渓叟良容」（容の字難読）は、一見禅僧の名前ように見えるが、A・Bを一連のものとすると、Aで自らを「愚儒」と称していること、落款とともに花押を用いるところから、博士家の人物とも見られよう。一方、Aは巻十一冒頭および巻十

三末尾の奥書めいた文章と同一人物の手になるもので、Bとは別人（Bの前段階のもの）とも考えられる。ここでは判断を保留し後考を待つ。

本奥書Cの筆者は、書写奥書にあるように紀伝道菅原氏の五条為庸で、『公卿補任』承応三年条によれば寛永八年（一六三一）一二月に従五位下侍従、同一〇年正月に従五位上、同一四年正月に正五位下となっているが官職は侍従のまま、「拾遺菅」と自称するにふさわしい。

書写者の杲快（一六三四～一七〇八）は東寺観智院第十二代院主で、『作文大体』最古写本として知られる天理図書館蔵観智院旧蔵本にある宝永元年八月（一七〇四）の修復識語を記している。他にも、広島大学文学部国文学研究室蔵『蘇悉地羯羅供養法』の寛文六年（一六六六）八月修復識語（松本光隆「平安鎌倉時代における蘇悉地羯羅供養法の訓読」、『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』汲古書院、二〇〇七、第五章第三節）などを含め、同院旧蔵・現存の聖教の保存修復を中心に、同院の発展に尽くしたことで知られる（西弥生「中近世における東寺観智院の存続と発展」『密教学研究』五一、二〇一九・三）。大東急記念文庫蔵元至正二十五年（一三六五）刊『景徳伝灯録』には、本書が観智院初代杲宝の『開心鈔』にたびたび引用されているので入蔵すべきだ、との知人の言を容れて彼の蔵書を譲り受けた旨の、寛文十三年（一六七三）四月の識語を記すなど、おそらくは伝来の聖教類のみならず、幅広い蔵書の形成に貢献したもので、本書書写もその一環と位置付けられるであろう。

『作文大体』諸本にない特徴は、細かな巻立と、末尾部分等の増補である。まず、巻毎の内容を掲げる。文（詩）・筆（四六文）の別および冒頭に全体を表す名称を掲げる場合はそれも示す。

巻一・筆：四六文の句名一覧およびその例文
巻二・文：「作文大概〈文筆〉詩体〈有呂律呂部〉」雑体詩
巻三・文：「〈同右〉〈律部〉」句題詩・無題詩等
巻四・文：題・韻
巻五・文：詩病
巻六・文：懐紙作法のうち端作
巻七・文：懐紙作法のうち本文、披講
巻八・文：聯句
巻九・文：対句
巻十・文：「分字部類事」
巻十一・文：句題詩作法

巻十二・文：対句の細かな具体例
巻十三・文：同前
巻十四・筆：「賦事」四六文の句名一覧およびその例文
巻十五・筆：「雑序賦」句末に焉・矣を置いて平仄を整えること（句題詩についての一文混入）
巻十六・文：韻律、「四韻句事」「双貫事」
巻十七・文：「詩六義部」
巻十八・文：詠史、山寺会、詩病、返音、義対
巻十九・筆：「四六文章体」「四六文章体格」「助字隔于字体類」書簡作法

これと小沢正夫「作文大体の基礎的研究」（『説林』一一、一九六三・九）において示された「作文大体内容一覧表」と対照させると、巻二：5雑体詩（例詩異なる）、巻四：6詩雑例のうち韻に関するもの、巻五：2のうち「詩病」、巻十一・十二・十三：6詩雑例のその他の部分、巻十四：3筆大体、巻十五：33雑序賦願文等有二病＋群書類従本等の3末尾にある焉・矣字を句末に置くことについての文章、巻十六：2十則の一部、巻十七：27六義、巻十八：2十則の一部、となる。

巻九は11文章有十二対と重なる内容であるが、「用対事」に「文筆同じく之を用ゐる」（原漢文。以下同）と注記することから、文・筆ではなく、巻八に続いて聯句に関原漢文、以下同しての記述とわかる。巻十も同様で、この二巻は何らかの聯句作法書を参照した可能性があろう。

さらに、巻一・巻三・巻六・巻七・巻八は、鎌倉中期成立の『王沢不渇鈔』の記述を大幅に取り入れているものである。詩体の呂律の二部に分けることもそうだし、本来「文」であるはずの前半冒頭巻一に「筆」の対句の説明が出てくるのも、同書が作法の説明を四六文の形式で行っており、その冒頭である巻上の句題詩に関する説明部分に、対句各種の説明を同時に行っていて、それを抽出したものと思われる。

すなわち、独特の叙述方法を持つ『王沢不渇鈔』から、『作文大体』に記述のない部分を抜き出して合体させ、両者の情報を統合しようとしたことが見て取れる。

用いられた『作文大体』は、観智院本にはない11、観智院本・東山文庫本にはない27・33を含んでいる、群書類従本などの増補本である。古態諸本にある2についても、群書類従本等で増補されている部分を含む。本文中にも、「古は破題・譬喩の二句の体差有り。今来は差別無し」（巻三、四ウ）、「後京極殿（九

条良経）の時、句題に韻を勒して用ゐる会之れ在り」（巻四、七ウ）といった、平安時代とは異なる状況を示す文言が見られる。

さらに本書独自の増補として、巻十九の存在がある。

「四六文章体」（一九ウ～二一ウ）は、北村澤吉『五山文学史稿』（冨山房、一九四一）第二篇第一章第八節に引かれる「虎関四六式」とほぼ一致する。この文章は、その後四六文作法書が成長していくなかでも引用されているほか、『心田詩藁』（続群書類従）末尾の「文章指南」ともほぼ一致するものなので、本書編者はそれらのどれかを目にして取り入れたのであろう。ここの例句には、本書では省かれているが、『本朝文粋』や『賦譜』、さらに円仁「寂光土記」から引かれたものもあり、顕密仏教に通じ、博士家との接触も多い虎関の教養を反映したものとなっている。なお、巻一の疎隔句の例句は、もともとこの「虎関四六式」で十字の長句（単対）の例句であったものを転用し、巻十九では省略している。つまり、単純に巻十九を付加しただけでなく、例句の入れ替えも行っていることになる。

「四六文章体格」（二二オ～二八オ）は、福嶋俊翁『虎関』（一九四四初刊、著作集第二巻所収、木耳社、一九七四）に引かれる「秉払語式」、すなわち虎関師錬（一二七八～一三四六）自身の秉払式の文章そのものである。謝詞中に「恵日之光、至七葉而増耀」（二三ウ一行目）、と恵日山東福寺第七世無為昭元への褒辞が含まれているように、虎関は徳治元年（一三〇六）、無為会下にて蔵主となり、結夏に秉払を遂げ（『海蔵和尚紀年録』）、その後円覚寺においても行っている。その全体は、彼の語録である『虎関和尚十禅支録』末尾に収録されている（国会図書館蔵慶安四年（一六五一）刊本参照）が、そこでは句ごとの分かち書きや対句の種類の注記等はないので、「秉払語式」を参照したものであろう。

「助字隔于字体類」は明確な出典を見いだせないが、『大日本史料』十二之三十二、元和五年（一六一九）十二月十九日条、直江重光（兼続）卒去記事に引かれる南化玄興撰『文鑑』（大日本古文書『上杉家文書』二、では「南化玄興文鑑写」という書名になっている。重光筆の写本）に類似の記述が見られ、『古今韻会挙要』等を利用して作られた、五山における初心者のための手引書の類からの引用である可能性が高い。

最後にある書簡作法も、五山で行われた啓札（少年僧に対する儀礼的な書簡、四六文で記される）に関わるものであろう。

このように本書は、平安時代以来の伝統である王朝漢詩の作

法書の代表的な存在『作文大体』が中世に入って増補され、そこに真言宗僧による新たな作法書『王沢不渇鈔』を利用した増補が加わり、最終的に五山文学との接触でさらなる増補が行われた、特異な様相を示す伝本である。虎関の著作の成立、すなわち鎌倉末南北朝以降で、おそらくは室町時代、公家と五山の文化的な交流が深まるなかで生み出されたものであろう。

〔翻刻凡例〕

＊常用字体を用い、句読点・中黒を補う。なお歌・哥・謌、気・炁の別は残した。

＊訓点はそのまま翻字するが、竪点は省略する。

＊全体に、内容と無関係の恣意的な改行や大字・小字の区別等が行われているので、それを適宜変更して通読の便を図る。なお、小字にすべき部分は〈　〉で括る。

＊第一二丁と第一三丁は錯簡とみられるので、正しい順序に変更する（本文中の表示はもとのまま）。

＊他本や出典を参照するなどして、明らかに誤脱と判断されるものについては、（　）内に傍注訂正を、〔　〕内に補足を行うが、同意の別字はそのままとした。正しい形が推定できない場合は（ママ）を付す。なお、（　）を付さない傍注は底本にあるものである。

〔翻刻〕

翰林辞巻第一

願文・呪願・賦・序・表・讃等各有文体之故実、然而辨二句ノ名ヲ一避声等事皆可用之耳。

其句名者、発句〈付傍也〉・壮句・緊句・長句・隔句・漫句・送句。

発句ニハ者　原タツネミレハソレ　夫観ミレハソレ　夫于レ時

傍字者　抑　就ク中カン　加シカノミナラス　之〈是則発句也。入中用之曰二傍字一〉

壮句者〈三字有対〉　所謂イハユル　臥ス洞雲〈平〉棲ム嶺月ニ〈仄〉

緊句者〈四字有対〉　所謂　城柳雨夜〈仄〉沙草風秋〈平〉

鏡聲已連〈平〉繊塵未散〈仄〉（1オ）

長句者、従五字至九字用之。以二句為一絶、有対。所謂

五字者　籬竹煙漸軽〈平〉皐蘭露欲落

六字者　対暖雨之蕭々〈平〉思濃華之焔々

七字者　始命周詩之楽遊〈平〉後催和謌之逸興〈仄〉

八字者　稟周旦漢霍之貴種〈仄〉長五智三密之法門〈平〉

九字者　排甲第於陽明里之傍〈平〉賞景気於翹材館之下〈仄〉

隔句者、有六体。軽・重・疎・密・平・雑也。各以四句為一絶也。去声之様如右。所謂

軽隔句〈上四字下六字〉野村ニ日暮テ〈仄〉鹿鳴林露之程ニ〈平〉

江館嵐寒テ〈平〉猿叫峡煙之裏ニ〈仄〉（1ウ）

重隔句〈上六字下四字〉唐堯節倹之構　林月照黄

白氏窮老之栖　山泉注石

疎隔句〈上三字下七字、或下多不限〉赴之者　超八之醍醐為糧

尋之者　唯一之宝車為乗

密隔句〈上五已上、下六已上〉桃李不変也　一色二香之理焉

煙霞凝然也　無来無去之相矣

平隔句〈上下均平、不限多小（少カ）〉雖示八相　本是久成〈平〉

雖レ唱滅度ヲ一　実亦常住

林花散春梢ニ一〈平〉翻曼荼之　蕚（ハナフサ）〈仄〉

池月澄ニ秋水ニ一　螯頗梨之珠ヲ（2オ）

雑隔句

楽ノ感コトハ形骸ヲ〈平〉観客連テ而成ス舞ヲ〈仄〉

栄均草木ニ〈仄〉　秋ノ色変テ而為春ト〈平〉

下実報方便之他郷ニ　機宣（宜歟）応転（自カ）

出界内同居之余国　利物結縁ス

已上隔句、片句多字、定不レ可レ余ニ廿字一ニ也。

漫句者〈不対句〉所謂　視聴之所レ触　無ニ不催ト感レ思ヲ一哉　等也。

送句者　所以者ノ也　而已（ナラクノミ）　哉　等是也。

又已上句避レ声ヲ。不レ叶（カナハ）ル之時用ニ焉矣一也。

巻第一終

巻第二（2ウ）

作文大概〈文筆〉詩体〈有呂律。呂部〉

呂者　古調・新調・廻文・離合・字訓・越調・江南・曲体。呂部、声韻不レ直（タヽシカラ）ヲ曰レ呂ト。

古調・新調者、付呂調ニ詞也。呂詩之中ニ声韻直（タヽシキヲ）ト、云ニ新調一ト、声不直云ニ古調一。廻文等ノ詩ニ可レ通也。

廻文者、上ノ句ノ首（ハシメ）ハ字下ノ句ノ終字用韻ヲ也。順逆行（ツラナル）、共被読故也。所謂

極テ望ヲ春水碧　通テ聴ヲ暁風清〈韻〉

北塞ニ帰鴻遠　中庭老鶴鳴〈韻〉

離合者、上下句首字有曲。所謂取上句首字篇用下句之首字也。所謂

霞ノ光ハ曙テ後望無極　雨ノ足夜来夢不ス長
鶴舞テ嵩山ニ春日静ナリ　鳥囀テ花樹ニ晩風狂ス

字訓者、毎レ句合テ二初ノ一字一ヲ成ス二句ノ終ノ字一也。所謂

山喬テ通レ跡ヲ嶠シ　石ハ少帰庭ニ砂
人立テハ列レ位ニ　吾行ハ路赴レ衙ニ（3オ）

越調者、必ス絶句ニ作ルレ之ヲ。第三ノ句六ノ文字ヲ用句ノ中ニ対、毎二句ノ終一居韻ヲ也。所謂

処々放遊与不空〈韻〉花前置酔（酒酔カ）　和風〈韻〉
横東虹〈韻〉帰北鴻アリ　春日眺望測伴同〈韻〉

江南曲体者、以テ四韻成ス一首ヲ。句ノ字数不同也。第二・第三句ト対之、故第三句之終居韻（ノ）也。所謂

憶亀山ヲ々々勝俗寰　洞花雪脆春望白シ　渓葉霜深秋路斑
豈不憶二亀山一

巻第二終

巻第三

作文大概〈文筆〉詩体〈有呂律。々部〉

律者　句題・双貫・無題・非句題・賦物・経題・詠史・山寺会・贈答・偶唫。律者、声韻不ヲ謬レ云律。

句題者、以五言ノ詩一句ヲ為題ト。上下ノ句随テ時ニ、所謂春作四時ノ始、上ノ句ノ題也。（3ウ）

発句〈上句〉又題目　○平々仄々仄々平韻　○仄々仄々平韻
胸句又破題　○仄々平々仄々仄韻　○平々仄々仄韻
腰句又譬喩　○仄々平々仄々仄々○　○平々仄々仄々○
落句又述懐　○平々仄々平韻　仄々平韻○

題目・破題・譬喩・述懐、此体之名専付序体ニ名目也。已上二四不同・二六対・（4オ）三連・居韻之字様也。六韻・八韻・十韻・十二韻・百韻等可レ准二知之一。

発句、述一首之大綱ヲ、不用対ヲ也。以テ句題五ノ文字ヲ散在シテ置ク処々ニ也。

胸句者、述題之意、比類述也。可用対也。

腰句者、同上ノ句ノ体ニ、古ハ破題・譬喩二句体有差（シナ）。今来ハ無二差別一、以テ二尋常ノ句ヲ為一レ腰ノ句ト一、此故実也。

落句者、不テ用対ヲ総別ニ述懐（オモイ）句ヲ（述レ懐（オモイ）句カ）。総ハ者凡身之有様等也。別ト者ハ付二令（合カ）題一有感興由也。已上句題一首様也。所謂

春作四時始〈各分一字〉
算（カソ）へ取二四時ノ十二廻ヲ一　以テ春ヲ為レ始楽先ッ催ス

節存テ次第ヲ東風起　梅ハ是最兄上月ニ開
青帝迎テ年ヲ施ス二木徳ヲ一　玄英改テ律ヲ動ス レ葭灰ヲ
誠知ヌ玉燭調和シテ後　霜草自レ今任ス往来ニ

双貫者、付テ二句題ニ一有同類ノ之畳字、名二双貫ト一。所謂東西・遠近・視聴・竹樹・野沢等也（類也カ）類。付テ二此題ニ一聊有作骨。所謂以テ二畳字ヲ一分両句作也。（4ウ）

野沢ニ始テ迎春ヲ〈便タノ字〉

野中沢畔何傾レ楽ヲ　更送テ二三冬ヲ一始テ属ス レ春ニ
雲夢径紅ナリ花ノ綻フル暁　洞庭沙緑草ノ抽辰
鞭テ レ馬ニ行々トシテ為ナス歴覧　出渓ヲ啼鳥ハ似レ呼ニ人

無題者、非句題総而曰無題。山寺会類也。

子ネノ日野遊〈同〉

東郊ニ雪尽テ天徐ヤク暖ナリ　策テ レ馬ニ飛軒クルニ興不レ空
立テ倚テ二老松一携白露ニ　坐テ芼エランテ二若菜ワカナヲ一就ツク春ノ叢ニ一
時迎テ子日ヲ羈遊々　源起我朝習俗風
人慣長生ヲ交会ノ処　酔来ハ弥楽ム野煙ノ中

非句題者、四字題也。依テ レ非ニ二句題一曰二非句題ト一也。題ノ字胸腰等ノ句不ス レ憚ハヽカラ作ル也。

賦物者、賦一字題也。百詠詩等是也。又三字有之。（5オ）

賦ル秋ノ旅ヲ詩〈同〉

遊子三年ノ行　征人一曲ノ歌
秋風盈レ袖渡　故園ニ遠情多

経題者、取テ二経ノ一句ヲ一為ス レ歌題歟ト也。謂二之ヲ釈教ノ詩ト一

唯有一乗法〈舎利報恩作也〉〈同〉

十方ノ仏土余経ノ裏　妙法ノ真文独有レ差
無二無三唯一ノ教　非羊非鹿大牛ノ車
衆星掩レ影ヲ円融ノ月　諸樹慙レ薫実相ノ花
可レ悦釈尊留ル二舎利ヲ一　鶴林ノ春雪ハ幾ノ煙霞

詠史者、取テ史書文ヲ為レ題ト也。乃至人ノ名等也。

賦ス上陽人ヲ

六十年来幽閉女　宮門一タヒ鎖テ又何行ユカン
紅顔在昔ムカシ鏡中ノ媚　白髪只今頭上ニ生ル（5ウ）
暁雨滴添懐レ旧ヲ涙　秋燈挑尽ス送レ宵ヲ情
両眉細ホソシテ画テ衣裳窄スホシ　莫レ見外ウトキ人ヲ齢漸傾

山寺会者、詩、古寺臨テ二其処々ニ一作二彼ノ景気ヲ一也。諸ノ名所・別業・閑居等可准二知之ヲ一也。

春日於来迎院ニ一即ツク事ニ〈同〉

洛陽城ノ北大原ヲハラノ中　有二一ノ道場一異俗門ニ

庭草雨過テ春露重　洞花風定テ白雲閑
寺ハ伝龍象幽居ノ地　隣ハ卜陳隋旧跡山
水石煙霞看未飽　留連テ終日欲スル何還ラント

贈答者、自人ノ許送レ詩之時ハ、返答之云也。不二避彼ノ人作之韻ヲ用レ之時ハ、心押本韻ヲ・答継二本韻一、如此可レ書之ヲ。雖二何度タヒ一ト常用本韻也。又用他ノ韻ヲ事在レ之。端書本体不委書、但随体為有レト興多書之ヲ在之。

頃ハ日右将軍翫二三冬之景氣ト同一ヲ、呈アラハス六義之篇章ヲ、見コト之ヲ錦繡遮レ眼ニ、読レ之金玉有レ声、不（6オ）レ能二黙モタシテ止ヤムコト一、敬テ押二本韻一ヲ而已

一排ヲシヒラケハ二疎牖一ヲ遙ニ瞻望ス　風葉飄零ス秋後ノ林
月色ハ元来モトヨリ崑岳ノ玉　松声ハ在昔楚台ノ琴
盛衰無主生涯夢　禍福在時人世ノ心
惨膽タン洞雲飛散レ雪　冬ノ天景炁望難禁

閑中偶唫等者、無題、述懐旧也。

桃李色々雖レ識レ境ヲリヲ　無詩酒友与今空
二旬無二官猶浅　三月ノ初三花独紅ナリ
停テ盞ヲ先思巴字ノ水ヲ　閣サシヲヒテレ毫ヲ偸ニ恥魏文ノ風
謌鶯舞蝶抛吾否　春意ハ不来学牖ノ中

巻第三終

巻第四

題用意事　付テ題ニ有虚実、繋テ風月出レ之ヲ曰二虚題一ト、付史書ノ奥理ニ出レ之ヲ曰二実題一ト也。

付題注事　付韻ヲ　題中ニ取韻ヲ　各ニ分一字ヲ　便字ハ　勒レ韻ヲ等也。（6ウ）

付韻者、寄テ当題意ニ以艶韻ノ字ヲ以其ノ字ヲ為付之也。仮令有月題ニハ明ノ字、若有風涼等也。所謂

松竹春増スレ色ヲ　以栄為レ韻

余可准二知之一。得テ此ノ題ヲ作詩ヲ之時、大旨以テ付レ字ヲ用二発句ノ韻ニ、下ヲ胸ノ字モ事ス之也。

題中取韻者、於テ二所ノ題ス五字ノ中ニ、平声ノ字及二三字一ニ之時、用二此註一ヲ。所謂

春ハ生哥（ママ）ノ中　題中取レ韻ヲ

得二此ノ題一ヲ作詩之時、三時（字カ）若四字中随一用ニ一韻ヲ、彼ノ用韻之字ヲ必用二発句之韻一。題目ノ字ナル故也。

各分一字者、難題之時多用二此註一ヲ。平声ノ卅二韻之中ニ随作者意随一可レ用レ之云也。所謂

春ハ作四時ノ始　各分一字ヲ

得二此題ヲ一作詩之時ハ、「春ノ日同賦ス春ハ作タリト云四時ノ始ニ一詩各分一字探得其字ヲ一」、或「春ノ日同賦春作四時ノ始各ノ一字詩探得其字一」如此書也。探得其字ヲ一者、各ノ中ノ用此韻ヲ云心也。此字又大旨発句ノ韻ニ用之ヲ。又用胸腰之ノ間ニ自落句ノ韻用レ之ヲ也。

便字者、当題五字之終ニ有平声之字時、幸ニ叶二題ノ心一ニ有テ艶ノ字之時、便ニ以二其字ヲ一為スレ韻ト付ル也。所（7オ）謂ル

野沢始テ迎レ春ヲ　便ニ以テ春ヲ為レ韻ト

得テ二此ノ題ヲ一作詩之時、以テ二後ノ字一ヲ用二発句一韻。題目ノ字ナル也。

勒韻ヲ者、山寺ノ会等無題之時用二此ノ事ヲ一。四韻・六韻等連テ韻字ヲ出ス之如次。以二後ノ字ノ韻ヲ一付二常景気ニ継一上詞一也。後京極殿之時、句題ニ用勒シテ韻ヲ会在之。作テ此詩ヲ一書之ヲ時

春ノ日於山寺ニ(即カ)召テ事ニ勒

如此於端書下ニ一付二勒字ヲ一也。

絶句者、通句題・無題・呂律詩一体也。大旨祝言ニ用レ之ヲ。所謂作文始・新亭ノ会等、四韻ノ詩之発句・落句二韻也。若シ用ルレ対ヲ時、発句対レ之也。

巻第四終

巻第五

詩字数事　四言・五言・七言・八言、古作ノ中ニ皆有二此数一。常途ニハ五言・七言用レ之ヲ也。

詩病事　平頭・上尾・蜂腰・鶴膝・大韻・小韻・正絶(紐カ)・傍紐、秘府論等ニ雖レ有レ多種、常ニハ避二八病ヲ一。近来（7ウ）避八病ヲ事、試ノ詩答(若カ)ハ放島之外不レ避之ヲ。於常途ノ之時ニ者、大韻・小韻・三連・捻二ノ四病可避之ヲ也。

大韻者、以テ当用一韻ノ字ヲ一於一首ノ中ニ不レ可レ用二他処一也。

小韻事、四韻・六韻等正当作之面ニ所ノ居韻ノ字他処ニ不レ用レ之ヲ也。

三連者、一首七言・五言之中ニ、自下三字不同声、上下ノ同ク句可レ避レ之ヲ也。

捻二者、二四不同二六対等違(タカフル)レ声ヲ、名テ為ス捻二ト一。此ノ外連綿ノ病尤可レ避レ之ヲ歟。

連綿ト云ハ者、毎句行横同通不用天象地儀ノ等ノ之字也。此病者、連句之時可レ避レ之。但四句無憚。四句者二韻也。於レ詩者猶可レ憚レ之也。

〇〈天象〉〇〇〇〇　〇〈天象〉〇〇〇〇
〇〈天象〉〇〇〇〇　〇〈天象〉〇〇〇〇
已上二通皆天象。二通已上可レ准二知之一也。

巻第六（8オ）

許同字事　四韻之時、発句落句之間同字用之無憚。六韻已上詩同字三字許之也。

詩書様事　七言陪テ応ス製ニ・応ス令ニ・応レ教ニ一首乃至官姓。先付端書、名朝臣上字等ノ事随処ニ可斟酌。

七言字者、序者若当座ノ首長ス人用之ヲ、余人ハ不レ書（カ、）レ之也。

陪字者、用応ス字ヲ之時書レ之也。

応製者、禁中。応令者、后宮。応教ニ者、親王家也。

一首者、書否有人ノ晴ニ賦、其ノ詩一首ト書ハ（ママ）成也。

官姓名等者、随テ処ニ次第ニ略ス之レ。於上字ニ禁裡ノ外一句不書之。

即ハ事ニ山寺会無題ノ詩ニ書之ヲ。答ハ言志書也。

巻第七（8ウ）

次書詩事　於四韻詩六行三字ニ書ク之ヲ。所謂九字五行八字一行、如此書。自然ニ三字ニ余也。八字行也用第四ノ行ニ尤宜。畳字等不被書切也。又結行ニ書八字ヲ常ノ事也。於テハ当座ノ会ニ一、以一句ヲ為ス一行ト並書七字ヲ也。六韻已上乃至十韻一百等、不及ニ沙汰一ニ無量也。

詩披講事　作法准和哥ニ可レ知之ヲ。高声指声読也。先講声。次詠声、律ノ曲也。今ノ朗詠曲是也。次頌声、呂曲也。今ノ朗詠佳辰令月曲也。

重会紙等乃至講師読師作法、皆如レ和哥。

巻第八

聯句事　避声居レ韻次第可レ准ニ知詩一ニ也。大旨五言也。二四不同二九対也。又七言連句間マ、々在之。大唐此事、所謂朝侯（候カ）日高冠額抜（ヒタイ）　夜行砂厚履声　忽（イソカハシ）

等比其例也。（9オ）

略頌曰、執筆・発句・亭主・入韻云々。尋常会大旨用巡句云。巡句者、於一人不用半句〈一句・三句等是也〉、必用重句也〈二句・四句等是也〉。

巻第九

避同字事　於花月等明字者、於一折面三字云々。於詞字強不嫌之。

用対事　文筆同用之。秘府論等雖有多種常用八対。

字対者、天象・地儀一類対也。日与月、山与河類也。

色対者、青・黄・赤・白・黒等類也。此猶字対也。

員対者、一・二・三・四等一類也。此猶字対也。

片対者、人与鐘、大与羯、如此以篇対、曰（曰片対カ）也。（9ウ）

異対者、天与地、於如此惣篇目字各対異類、故曰異対也。

音対者、男与北、女与南、如此借音対也。

義対者、雪与烏、黒与鷹等、以黒白之義対也。一切准レ知（セヨ）之一。

畳対者〈或重対〉、風颯々、月蒼々。

花鳥対者、於雪月花明物、通可対也。

巻第十

分字部類事

天象〈又乾〉〈或此内分歳時部也〉日月・風雲・時節・年候等一類也。

地儀〈又坤〉〈或此内分居所部也〉山河・林叢・家門・墻壁等一類也。（10オ）

植物〈草樹〉松柏・蘭菊等類也。

動物〈或此内分魚虫等部也。〉牛馬・鳥鶏・螻蟻・鯉鮎等一類也。

人倫　仏神人・男女・父母等一類也。

人体　眼・耳・鼻・舌等一類也。

人事　仁義・礼智・病喜・貧福等一類也。

雑物〈或此内分宝貨・服飾・乗御也〉金銀・珠玉・錦繡・車船等一類也。

飲食　飯・汁・餅等一類也。

光彩　赤白・紅紫等一類也。

方角　東西・横縦・左右・上下等一類也。（10ウ）

員数　一二・複単等一類也。

詞字　去来・進止等一類也。〈聊相乱人事也。〉

重点　颯々・蕭々等類也。

畳字〈此内在異訓畳字・詞畳字・双貫畳字等也。〉

異訓畳字　遮莫等類也。

詞畳字　恐惶等類也。

双貫畳字　山河等類也。

人名　三国人名也。

処名　三国名処也。

詞字・重畳字・人名・処名、強不用字対也。（11オ）

本云、得度転之(ママ)説本、致推量之罵切、於愚儒之舛誤、侯君子之添削耳。

巻第十一

志道重書之(ママ)予、多視文筆之体、頗載枝葉之詞。而今、於此一巻之書者、勝百鎰金哉。呈儒術之奥頤、覚庸才之浅知。尤可秘々々、勿令忽矣。

或本云、題目ノ句ニハ用題ノ字ヲ、破題ノ句ニモ用題ノ字ヲ、共ニ以テ有例事。暫結句ニ題字ヲ例。

花有浅深云題　菅家御作云

蘭ハ為ニ送レ秋深紫結　菊ハ依テ臨レ水浅黄凝　是也。

発句ヲ不二必ス載一尽題ノ字一ヲ事、句題ノ詩ニハ者、発句ニ悉載尽ス題ノ字ヲ一、是常ノ例也。又有不尽之例。（11ウ）

蚕声入テ夜ニ催ス題　順詩云

蚕ノ声切々夜漫々　欹テ枕ヲ聞ハ還テ忘玉箱ヲ一

入催之両字不作之ヲ矣。

発句ノ対事、多ハ不レ対レ字ヲ。而

雨来テ花自綻ト云題　藤篤茂

片々雲膚(ハタヘ)遮テ漢ニ合(カナフ)　蕭々雨ノ脚纔ニ檐ニ飛

発句ニ不レ用二題ノ字一ヲ、用同読他ノ字ヲ事、発句ハ皆作(ツクリ)二載題ノ字一ヲ其ノ字ヲ不レ可レ替(カフ)。而、

春雨洗花顔云題　源英明

春雨ニ何因テ細脚頬　為ニ過テ二花面ヲ一洗フ二紅塵ヲ一

以テ面ヲ賛(替カ)顔ニ以テ為例ト而已。

発句ニ重用同字ヲ事（13オ）

水炁先秋冷ト云題　江ノ以(コレトキ)言詩云

水気自教二冷炁ヲ通　先テハ烋ニ忽ニ怪ム与レ秋同コトヲ

気・秋字也。蓋夫一句ノ中犯二念二ノ病ヲ、然モ而定ム名詩ト矣。

発句幷ニ胸臆(膝カ)句ニ用同字ヲ事、一篇ニ不作同字ヲ、是麗体者。

春雨洗花顔題　源英明

花情若聴吾微誨　花(莫持カ)持妖姿妄折人　是也。

花字既有二、以是為証拠。

巻第十二

余情幽玄体　清風何ニカ処隠(カクルト云)題ニ

庶人ハ展テ簟ヲ宜相待　刊(列カ)子ハ懸テ車ヲ不往還

又花ハ寒(衍字カ)蘭菊ノ点叢題ニ　菅三品（13ウ）

蘭蕙苑嵐摧紫後　蓬萊洞月照霜中
是等誠幽玄ノ之体也。作文士熟察比(此カ)ノ風情ヲ而已。

破題体　宮嶋囀暁光題　菅三品
西楼月落花間曲　中殿燈残竹裡音
是毎句破題也。

似物体　天浄識賓雁題　菅家御作
碧玉装箏斜立柱　青苔色紙数行書　是也。

題意彷彿体　秋未出詩境題　紀斉名
本不置関城終去　縦無帰路欲妨行

結句述懐体　霜葉満林紅題（12オ）
紅林実有重青日　素髪視無更緑春

双関体　秋声脆管絃題
落葉響随孤竹乱　長松韻逐七糸軽
竹是管也。糸是絃也。是則管与絃上下句別作。毎句如此。

巻第十三

句中対体　秋夜作　江以言
林叢唯任蕭条(色カ)也　九月纔残三日光
林叢・蕭条、九月・三日是也。

声対体　香乱花難識題　江相公
若非百松籠中透　実是梅檀浪底沈
百与梅是也。（12ウ）

側対事　満月如レ鏡ノ題ニ　平佐幹
光清テハ不弁青銅ヲ冶カ　影散ニ更疑百錬ノ消カ
青与百対也。百白作有之故也、是也。

数対幷次(ツイツル)字、　強(アナカチ)不対事　王昭君詩云、
胡角一声霜後ノ夢　漢宮万里月前ノ(モノヲモフ)腸
声与里不スレ対、是也。

方角対事　山中述（懐）
商山ニ月落テ秋ノ鬢白　頻(顕歟)水波揚左耳清
秋是西、左是東右(衍字カ)、方之対、是也。

人名対事　橘在列
陳孔章カ詞ハ空愈(イヤ)レス病　馬相如カ賦只凌レ雲ヲ
凡不レ限ニ二人ノ名ノ対ニ一総テ名之時ニハ未タ必シモ求ニ二対ノ字ヲ一。世間出世間・内典・有情非情等准以テ如レ此矣。

（14オ）

人名与(ト)何公対事　（雨）晴ニ対ト云月ニ題ニ
親対偸言玄度カ友　高登テ漫ニ疑庾公カ楼カト

以テ二玄度ヲ一対二庾公ニ一、是也。非二対字一也。

抑近来ノ詩ノ体、二四不同二九対、五言是也。二六対、七言也。下三連計去之ヲ、在二先達之口伝ニ一耳。妄以テ不可推量愚案等ヲ一、能々向テ先達ニ一必可レ察之而已。為弘風月之情、今黙（点カ）文筆之体、於愚拙之誤、儒（ママ）、侯賢才之考而已。

巻第十四

賦事〈題目下之裡書之〉

或本、賦是雖レ言ト古詩ノ体ヲ一、玉章皆納二此中ニ一。更ニ無二別ノ大体一。頗以（ママ）意ヲ不可推量一。必可問二先達、定有二口伝一歟（カ）。

発句　粤（コ、ニ）云（コ、ニ）予　異口同音　臣聞　等也。施頭一・二・三・四字、無対也。

傍字　当知　就中　既而　然後　于時（14ウ）等也。発句之次施之。

〔壮句〕　三字ニ有対テ調レ声ヲ而已。壮句（ママ）但詩序未レ用レ之。

壮名句　春華鮮　秋月朗　雲眇々　月蒼々

緊句　或ハ胸、或ハ腹、或ハ腰。有対調レ声ヲ。

緊名句　椒房華朝〈平〉　蘭殿雪夜〈仄〉

長句ハ或ハ頭、或ハ腹。賦猶施腹ニ一。従レ五字至レ九字或ハ十余字ニ、有レ対テ調レ声ヲ。或ハ云、長句ハ従レ五字或ハ十余字、二句ヲ為二一句一ト、平他去レ之ヲ。必不去之ヲ六字ノ句。

長名句　金商七月之候〈仄〉　銀漢二星之期〈平〉

隔句　避声事、自平声起平他々平、或説多。又未必去之。自他声起他平々他。此外或十字。

隔（長カ）名句　梵唄ハ播二声ヲ於（編カ）法界之風ニ一（15オ）

幡蓋ハ飄ス影ヲ於尽虚空之霽ニ一〈仄〉　淳茂

或十一字、所謂是也。

排（ヲシヒライテ）月窓ヲ以仰二天人師ヲ於其ノ際ニ一〈仄〉

巻風幌ヲ以崛ス龍象衆ヲ於其ノ前ニ一〈平〉　萱三品

或十四字、審為見粤。

紫霍（宸カ）殿之皇居ニハ七廻書二賢聖ノ之障子ヲ一〈仄〉

大嘗会之宝祚ニハ両度黷ス画図之屏風ヲ一〈平〉

抑古賢何必以二此ノ句ヲ一定ム長句ヲ哉。皇居ノ字・宝祚ノ字、為ス二終ノ字一ト。若ハ七廻字・両度ノ字、雖為ス二上句之終一ト、已ニ足リ去ニ声レ。頗可レ謂二雑隔句一ト。縦雖不得去声ヲ、軽・重・疎・密・平隔句尚ヲ未必去声ヲ。何況今足レ去レ声、須謂二雑隔句之異名一ト。仍所レ定非レ無二不審一矣。

重隔句　東岸西岸之柳〈仄〉　遅速不同〈平〉（15ウ）

南枝北枝之梅〈平〉　開落已異〈仄〉　保胤

疎隔句　山復山〈平〉　何工削二成青岩之形一〈仄〉

水復水〈仄〉　誰家染出碧澗之声〈平〉　朝綱

密隔句　山排(桃カ)復野排(桃カ)〈平〉　日曝紅錦之幅ヲ〈仄〉

門柳復岸柳〈仄〉　風綩(ワカ)ヌ麴塵之糸〈平〉　斉名

平隔句　眼ノ前之万事〈仄〉　逐テ歳ヲ以雖レ変ス〈仄〉

耳ノ底之一言〈平〉　随テ日ニ以テ難レ忘〈平〉

雑隔句　或ハ上十下八、或ハ上多下ハ少、或上ハ少下ハ多、員数不定。或ハ上ハ十余下不同也。

漫句ハ、或ハ施頭、ニ或ハ尾、或ハ代(カフ)送句ニ。四五字、七八字、或十余字、無対不レ調レ声ヲ也。（16オ）

送句　如件ノ　如斯ノ　畢乎　是等也。施尾、一・二・三字、無対。

此地之為体也、何ノ唯淳風坊ノ中ノ一ノ河原ノ院哉。

巻第十五

一雑序賦　願文等ニ有二病。一ハ長短ノ病、二ニハ上尾ノ病。長短ノ病トハ者、片句(カタ)ハ長ク片句(カタ)ハ短、是也。上尾ノ病ハ者小異二詩ノ病一ニ、詩ニハ必他ト平々他ト避レ之。雑筆ニハ必壮句・堅(緊カ)句・長句上下句終不レ用二同声一。

置焉矣字事　為避声者、所謂是也。

妄風起テ性海ニ焉〈平〉　漸動ス流転之浪ヲ〈仄〉

罪塵積心地ニ矣〈仄〉　屢成ス感障之山ヲ〈平〉

為避声ヲ足(タ)レサン字ヲ也。又ハ為二送句一也。為足字ヲ者、一二年来能事畢矣。（16ウ）

句題　唐家ノ詩ハ随レ物ニ言テ志、曾無之。我朝又貞観以往多以如此。中古以来好(コフ)ムト句題ヲ一云々。或ハ云、此四句云律ノ詩ト也。

巻第十六

律詩事　或本云、調声事ハ能調二平他ノ声ヲ一之義也。平声之外上・去・入之三声ヲ総テ謂之ヲ他ト。随二四声一ニ詩ニ避声ヲ調韻、謂之ヲ調声ト也。

終字事　凡上ノ句ノ終ノ字ハ必他声也。但於テ発句ニ者不定也。用レ連韻ヲ法之時ハ平声也。不レ爾時ハ者他声也。下ノ句ノ終ノ字ハ平声、韻ノ字故也。上古之時ハ用韻ヲ不定、或ハ用平或用他声ヲ。近来ノハ不然、以テ平ヲ声為ス韻トノミ耳。発句・落句無レ対、結句中ノ二句也。有対声也。

調声事　若五言ノ詩ニハ二四不同二九対。謂、若ハ上ノ句若ハ下ノ句、第二与ト第四平他応不同、謂之ヲ二四不同ト。上ノ句第二ノ字与ト

下ノ句ノ第四字ト必応同声、謂之ヲ二九対ト。毎レ句如レ此ノ。若七言ノ詩ニハ、二四不同二六対。謂、若ハ上ノ句若ハ下ノ句、第二与ト第四平他不同如此ノ、第二第六同声也。毎レ句如レ此。

四韻句事

発句ハ題目ノ字ニ加テ余ノ字ヲ一不時意趣ヲ如二題目ノ言之ヲ也。胸ノ句ハ破テ二題ヲ彰ニ其ノ意ヲ一也。謂之ヲ破題ト。

宮鶯囀ト暁光ニ題ニ曰　菅三品（17オ）

西楼ニ月落花ノ間ノ曲　中殿ニ燈残テ作（竹カ）ノ裏ノ音

腰ノ句ハ述二事ノ之気味ヲ一也。謂二之ヲ比興ト一而已。或ハ用フ二本文一ヲ。比興ノ之体、

天浄テ識ト云二賓雁一ヲ題ニ曰　菅家御作

碧玉装箏斜ニ立レ柱（コトヂ）ヲ　青苔色紙数行書

落句ハ若ハ寄セヨ二時之景気一ニ、若挙心之所ヲ在レ以述二其ノコ、ロサシヲ一志ヲ一也。

双貫事〈或本云、所謂是也〉

草樹暗迎春題曰

春ノ生（ナル）ニハ無トモ跡ト漸従スレ東　草樹相迎暗ニ至ル中

向レ暖ニ因縁ハ唯媚縁（景カ）　尋レ陽ヲ媒介是柔風

庭ニハ増二冤色ヲ一晴ノ沙ノ緑ニ　林変容輝宿雪紅（ナリ）

芳艶不レ知何ノ処ヲカ契（チキル）　誰教シテ二計会ヲ一時ニ通セ一

巻第十七（17ウ）

詩六義部

一風　風ハ者、教也。鑽仰テ賢聖ニ詠述遺風ヲ、是ヲ等而已。

二賦　賦ハ者、鋪也。賦カ之言、鋪也。直ニ鋪陳テ令改二善悪ヲ、是也。

三比　比ト者ハ、不直ニ言二時ノ政之失ヲ一、取テ二比類ヲ一而言、或云比物ニ也。

四興　興者、直ニ言二時ノ政之美ヲ、取テ善ヲ喩レ之ニ謂也。

五雅　雅ト者ハ、正也。言テ今ノ之正（タ、シウ）レ道ヲ可為ス二後代ノ之法一ト也。

六頌　頌ト者ハ誦也。今ノ徳政、美盛徳ノ之形容ヲ、是也。

巻第十八

詠史事〈或本云、所謂也〉

資父事君（18オ）

懐忠偏得意　至孝自成レ人ト

抜（換カ）テ白何軽（カルンセ）レハ死ヲ　含テ丹ヲ在顕親ヲ

王生猶有母　曾子豈非臣

若向公庭論　応知両取レリ身

山寺会事　発句ハ大旨来臨ム此ニ、結句ハ此ノ処ノ風流景気也。処之ノ様子随于時。落句ハ述懐也如上。

詩病事　朝綱出之曰、凡詩有レ八病、其尤可避者、平頭・上尾・蜂腰・鶴膝、此ノ病也。

平頭病者、近来不レ去レ之也。上ノ句ノ第一二字、下ノ句ノ同平上去入、是〔也〕。但第一字同声不病。

○○○○○○○○○○　近来去ル二平頭一也。

上尾病、近〔来〕可避之。五言ノ詩第五ノ字与第十ノ字、七言ノ詩ノ第七ノ字与同平上去入、是也。随四韻詩可分別之。但発句之連韻不為病矣。

蜂腰病者、近来尤避之。五言七言共ニ毎レ句第二字与第四字（衍字カ）、同平上去入、是也。謂二四不同矣。

鶴膝者、五言上ノ句ノ第（18ウ）二字与下句第九字、不同平上去入、是也。謂之二九対。七言上ノ句ノ之中ノ第二字与第六字、不同者可避平声。如モ絶句ノ詩・四韻・長韻可准二知之一耳。

三連病ト者ハ、○○○○○○、如此（平平平／仄仄仄）ノ毎ノ句下三字同声、是也。

七言モ准レ之也。可レ避レ之也。

念二病者、一首之中有同字同心也。近来不去之。

越韻病者、尤可避之。所謂謬用ル相似之韻也。清韻詩用青字等也。

越調ノ病ト者、尤可避之。文字之数、或有余句、或有不足之句也。

返音事　凡文字必有返音。々々必有二字故也。略次（頭カ）曰、平上去入依下字、軽重清濁依上字云々。所謂平声之軽者東字、重〔者同〕類也。入声之軽者徳也、重者得也。皆依返音上下字云々。得軽重清濁之義、爰只挙平入二声者、上声之重者渉於去声云々。（19オ）〔去声〕軽者渉於上声、遁難分別之故也。入声之有被読平声矣。

義対事　西対者々東也。故自余方角対四季准之。東対金、々当西故也。自余五行可准之。十干・十二支・八封・方角・陰陽・左右・五色等又准之。又水対陽、々火故也。火対陰等准之。又東有対馬、々南故。以烏代黒、以雪代白、以双准二、以孤准一、等是也。

○仄○平○　〈嫌下三連〉　○平○仄○
○平○仄○　〈拗体様（ママ）〉　○仄○平○
○平○仄○　〈法也（ママ）〉　○平○仄○
○仄○平○　　○仄○平○

巻第十九

四六文章体（19ウ）

発句　茲審　伏惟　夫以　竊以　共惟　方今　於是　観夫

于時　汝当知　蓋聞　夫維

施頭、一・二・三・四字、不要対、蓋如是。字句未必限発句、只出大体也。

傍句　斯廼　然而　是於　将以　于時　誠是　何必　可謂

就中　等也。故　且　抑　可用是等者也。

壮句　三字、用対。発句之次用之。調平仄也。

微霰零　密雪下　有畛畦　無涯涘（20オ）

緊句　四句（字カ）二句、可調平仄也。

三陽交泰　万彙敷栄　進寸退尺　跋後蹇前

長句　自五句（字カ）至九字也。或十字、用対、可調平仄也。

五字　上方之三応〈仄〉　東序之両雄〈平〉

六字　逢法歳之新時〈平〉　修山門之旧例〈仄〉

七字　已知君世字無用〈仄〉　何堪守務而有褌〈仄〉

八字　携牌於午磬之已息〈仄〉　秉払於昏鐘之荐鳴〈平〉

九字　雖対聖賢於薫巻之中〈平〉　焉厠龍象於緇衣之列〈仄〉

十字　十一字　十二字

十三字　論其法材〈平〉　則東（束カ）学（覚カ）範参寥而為一〈仄〉

謂其道価〈仄〉　則並悪（悪カ）嶠済北而為三〈平〉

十五字　伝命之甚厳〈平〉　也今晨逢三大士之勧誘〈仄〉

伸辞之不逐〈仄〉　也此夜輸一都会之挙場（揚カ）〈平〉

隔句　真体、軽々・重々・疎々・密々・平々・雑々也。（20ウ）軽々重々、為最々（也カ）。疎・密次之、平・雑次之。

軽隔句〈上四字下六字〉恵日之光〈平〉　至七葉而増耀〈仄〉

法燈之照〈仄〉　騰百代而弥明〈平〉

重隔句〈上六字下四字〉積羅窓三余暇〈仄〉　猶諮（暗カ）漢篇〈平〉

欠慙嶺万里遊〈平〉　還報（執カ）梵筵〈仄〉

疎隔句〈上三字下七字〉蓋未必限七字、自五至九字亦不妨也。

密隔句〈上七字下三字〉蓋上七字、不以七限、自五至九字亦不妨也。

平隔句　上下斉等也。或五・六・七・八・九。

雑隔句　上四字、下五・六・七・八字也。

或下四字、上五・七・八字。

或上五字、下四・六・七・八・九・十二字也。

或上六字、下五・六(ママ)・七・八・九・十字也。
或上七字、下四・五・六・八・十一字也。（21オ）
或上八字、下四・五・六・七・十一・十二字也。
或上九字、下四・五・六・七・八・十一字也
或上十字、下四・五・六・七・八・九・十一字也。
或上十三字、下七字也。

讃句　四・五・六・七・八・九・十余字也。或施頭、或施尾、或代送句。不対、不調平仄也。若幸而相逢其韻者、亦不妨也。

送句　秉払上　憑上方　権柄旋　乾坤去

施尾、一・二・三字、無対、或有対。　者也　而已　者与　哉　者　耳

景　景者、時節之句也。

存　存者、我存句也。

取　取者、答嫌心句也。

与　与者、又上々譲句書也。

公　公者、公案之句也。

謝　謝者、上賛句也。（21ウ）

四六文章体格

索話

蕉(焦カ)尾於菟　摶噬当途　有転身策　一任将翳

提綱

山前一片閑田地　不籍耕耘無灌溉(漑灌カ)〈韻〉中有青々貫歳寒〈韻〉時人唯作竹松看〈韻〉有畛畦無〔涯〕岸〈韻〉

長句　左顧則水流花開　右眄則松老右欄(石闌カ)〈韻〉

〔漫句〕無端二千年前　竺乾有火顧(大カ)頂〈韻〉

名為円覚伽藍　以四聖六凡　一斉繋絆〈韻〉

老々大々　至他(死カ)無知其界畔〈韻〉

〔緊句〕後代児孫　謾〔恣〕盗(貪カ)悍〈韻〉

〔長句〕或売于蠟人　或博于鉄(鉄カ)弾〈韻〉

緊句　踏著不知　誠可惜歎〈韻〉

謾句　秉払上坐　今夜借上方麁剌梨　試為部(剖カ)判〈韻〉

以主丈画一画之(云カ)　唯聞四面凱歌声　何必鴻溝分楚漢〈韻〉

謝詞〈某〉

緊句　若窟(苦カ)瓦(凡カ)器〈仄〉　樸蔌散材〈平〉（22オ）

長句　取為自躍之金〈平〉　甘作不鳴之雁〈仄〉

雑隔句　躍禹門之三級〈仄〉　恨(恨カ)莫攀連(連カ)化之鱗〈平〉

棲漢苑之一枝〈平〉　但擬息倦飛之羽〈仄〉

長句　常記孟浩然之多病不才之句〈仄〉
　曾畏孝宣(帝カ)旁(箭カ)之脩名責実之言〈平〉
長句　適属保社之欠人〈平〉誤当大蔵之駆蠹〈仄〉
〔長句〕已知居世而無用〈仄〉何堪守務而有裨〈平〉
〔長句〕恨稟周利之愚〈平〉剰負慶喜之任〈仄〉
重〔隔〕句　冲燕雀於遙漢〈仄〉雖翥豈翔〈平〉
　策駑駘於嶮塗〈平〉屢跲(蹟カ)且躓〈仄〉
〔傍句　爰〕
長句　〔上方之三応〕東序之両雄
〔長句〕逢法歳之新時〈平〉修山門之旧例〈仄〉
〔長句〕携牌於午磬之已息〈仄〉秉払於昏鐘之発(存カ)鳴〈平〉
緊句　聴命悚兢〈平〉且驚且悸〈仄〉（22ウ）
雑隔句　進鼓談舌〈仄〉元乏霊嵩之金(全カ)機〈平〉
　退開辞唇〈平〉又恐叢林之闕典〈仄〉
緊句　事不終否〈仄〉黽勉就班〈平〉
長句　私恥輸于公儀〈平〉狐鳴慣于猊吼〈仄〉
緊句　納敗一上〈仄〉請許徇狂〈平〉
発句　伏惟堂上老師
緊句　風度凝遠〈仄〉器才翹英〈平〉
長句　挺高朗邁往之姿〈平〉秉剛毅不回之操〈仄〉
雑隔句　謹厳而楽易〈仄〉故士可近而不可得親〈平〉
　寛裕而疎明〈平〉故人知愛而不敢不畏〈仄〉
長句　論其法材則束覚範参寥而為一〈仄〉
　謂其道価則並(徳カ)蕖嶠済北而為三（23オ）
軽隔句　恵日之光〈平〉至七葉而増耀〈仄〉
　法燈之照〈仄〉騰百代而弥明〈平〉
〔傍字〕只願
軽隔句　寿而且康〈平〉積(ツム)甲子於七百〈仄〉
　老而益健〈仄〉開槌払於晨昏〈平〉
〔緊句〕言不能周〈平〉心猶有蓄〈仄〉
発句　次惟　山門両序　上方諸侍〈仄〉
緊句　珩璜晋宝〈仄〉杞梓楚材〈平〉
長句　接珍羽於鴛行〈平〉列飛翰於雁序〈仄〉
〔長句〕名不求而自至〈仄〉道欲晦自倍光〈平〉
〔長句〕下彼梁宋之姿〈平〉附此榱桷之用〈仄〉
〔長句〕畔(不審)遭(手カ)引平(某カ)之携〈平〉居摩扇(肩カ)之列〈仄〉
〔長句〕知鵬鷃之交翥〈仄〉恥駑驥之並馳〈平〉
〔長句〕若無謝拝之趨於凌晨〈平〉

争顕懇礼之残於今夜〈仄〉（23ウ）
緊句　更闌坐久〈仄〉巻而懐之〈平〉
送句　而已

拈提

方丈挙阿難問迦葉伝金襴公案。
拈云、阿難曾道、将謂如来恵我三昧。故至于此致斯問〔端〕。惜哉、迦葉不卸下衲衣痛与一拳、只如上方老人賦物。見在請説破、作麼生。提露去也。

桑畦雨過羅紈膩　麦隴風来餅餌香

冬至索話

焚船（孟明子韓信）背水　詭計相仍　革命義挙　誰是先登

提綱（24オ）

釈迦不説々〈韻〉晋文不正而譎〔〈韻〉〕迦葉不聞々〈韻〉
蕭何不戦而勲〈韻〉将頭不猛累及三軍〈韻〉緊句（ママ）　逓代相承
列隊成群〈韻〉王道不興覇業惟勤〈韻〉偏拠一方〔絶〕
信幷汾〈韻〉
軽隔句　法王（出カ）姦生〈平〉已揚（掲カ）僧堂之牓〈仄〉
徳欠変見〈仄〉早書観台之雲〈韻〉
平漫句　殊不知衲僧家
長句　不随陰陽之復剝　不帯元炁之氤氳〈韻〉
傍句　説甚　某（ママ）更希
緊句　灰飛葭管　錦添繡紋〈韻〉
送句　秉払上座憑上方　権柄旋乾転坤去也〈拈主丈卓一下云〉
夜来細把梅花看　春在枝頭已十分〔〈韻〉〕（24ウ）

叙謝

緊句　進寸退尺〈仄〉跋後疐前〈平〉
〔緊句〕少而抱痾〈平〉衰而（不カ）待老〈仄〉
軽隔句　生涯寂歴〈仄〉冷於楓落之江〈平〉
平居僻幽〈平〉廃於菊荒之径〈仄〉
重隔句　積蘿（羅カ）窓三余暇〈仄〉猶暗漢篇〈平〉
欠葱嶺万里遊〈仄〉還報（執カ）梵篋〈仄〉
軽隔句　以務守司〈平〉僅駆蝕書之蠹〈仄〉
無機弓（去厥）用（少カ）〈仄〉争酬問〔字〕之僧〈平〉
長句　常懐日暮道遠〔之〕慮〈仄〉則負任重人微之訕〈平〉
長句　適当売被買牛之時〈平〉叨応拈杖振払（塵カ）之役〈仄〉
長句　伝命之甚厳〈平〉也今晨逢三大士之勧誘〈仄〉
伸辞之不遂〈仄〉也此夜輪一都会之挙揚〈平〉
重隔句　持鼓以過雷〔門〕〈平〉先慙抜（技カ）短〈仄〉

乗槎而問銀漢〈仄〉祇覚天高〈平〉（25オ）
緊句　狂簡之情〈平〉伏増戦越〈仄〉
謾句　恭惟　堂上　老師
長〔句〕　鮫亮而純明〈平〉恢宏而博達〈仄〉
軽隔句　黄鐘（十一月）太呂（十二月）〈仄〉炁函天地之和〈平〉
　璞玉渾金〈平〉稟得山月之正〈仄〉
長句　抱過人之遠識〈仄〉擅絶俗之高標〈平〉
雑隔句　誦汗牛充棟之書〈平〉用不専於紙墨〈仄〉
　開錬仏鍛祖之冶〈仄〉妙只在於鉗鎚〈平〉
軽隔句　四衆成林〈平〉莫不霑於雨（法雨カ）露〈仄〉
　万衲是草〈仄〉皆自偃於徳風〈平〉
長句　人道法宝蔵之所帰〈平〉我思仏鑑道而可作〈仄〉
〔傍句　更希〕
軽隔句　檀施雲委〈仄〉見猗頓之傾倉〈平〉
　法算（年カ）争延〈平〉聞龍猛之授薬〈仄〉（25ウ）
緊句　懇悃之至〈仄〉倍万恒情〈平〉
謾句　又惟　山門両序（ママ）主
緊句　受材卓爾〈仄〉育（育カ）徳粋然〈平〉
長句　登（蚤カ）空驥騏之群〈仄〉屢賁鵷鷺之列〈仄〉
雑隔句　壅培而滋厚〈仄〉杞梓見凌雲之姿〈平〉
　追琢而早成〈平〉璠璵有造器之用〈仄〉
緊句　儼然排立〈仄〉毎各殊観〈平〉
雑隔句　漏鼓〔告〕更深〈平〉請坐（休カ）体〔含〕糊之訥〈仄〉
　粥鯨吼暁冷〈仄〉願趨献袖香之誠〈平〉
緊句　荒斐之詞〈平〉凡百賜（恕カ）忠〈仄〉
　拈提（26オ）
方丈挙二老宿長一線々〔々〕長公案。
頌曰、長鬚払雪斫柴来、赤脚和霜拾葉回、尊丈蘊崇則行火、
　煙消燄尽也無灰。
　索話結夏
人間尽道已春廻、翰苑花迎法歳開、若以黄連醸石密（蜜カ）、不妨
　団聚黒蜂来
　提綱
霊山一枝少林五葉〈韻〉不紫不紅無牙無蘗〈韻〉
長句　合十世古今為一春〈平〉統虚空法界為籬落〈仄〉
緊句　苾々芬々　猗々曄々〈韻〉
長句　是則円覚伽藍〈平〉亦名華界（厳カ）宝刹〈仄〉（26ウ）
謾句　無端有没意智老瞎禿〈韻〉

平隔句　拍(怕カ)其採摘〈仄〉　謂之護生〈平〉
　警其移栽〈平〉　謂之禁足〈仄〉
〔傍句〕　殊不識〈仄(ママ)〉
雑隔句　二三四七〈仄〉　処々分支而不傷其根〈平〉
　此土西天〈平〉　紛々取味而不損其蔕〈仄〉
謾句　〈拈主丈卓一下云〉　上方柱杖子　耳朶無検束〈韻〉
緊句　剗地〔出〕来　呵々笑曰〈韻〉
傍句　与麼説話
緊句　擒錦鋪繡　楡楊文墨〈韻〉　只事浮花　易若貞実〈韻〉
謾句　秉払上座軽々対他云（27オ）
　割尽黄雲稲正青　繰(繅カ)成白雲桑重緑〈韻〉
　索話〈東福寺出姦(歳節カ)座〉
〈拈主丈云〉手把如意〈卓一下々(ママ)〉撃砕珊瑚〈靠之〉収拾片
屑　皆尽陶朱
　提綱
平隔句　機先提持〈平〉　堂前滋草〈仄〉
　格外挙唱〈仄〉　甑裡生塵〈平〉
長句　俗(惣カ)麼呈露将去　未免宗風堕湮〈韻〉
傍句　直須
緊句　按下雲頭　歴艱味辛〈韻〉
〔傍句〕所以
長句　嵩山深雪之中有得髄(不審)一个　汾州苦寒之地出成器六人
　〈韻〉（27ウ）
傍句　雖然我東福寺門下又且不是
緊句　三陽交泰　万(万カ)彙敷栄〈韻〉
　蕩(蕩カ)然和炁　坐楽昇平〈韻〉
〔傍句〕且道以何為験
〔長句〕座中尽是桃源客　何必別(重カ)論洞裡春〈韻〉
　拈提
方丈挙乾峯示衆一不得挙二公案。
拈云、乾峯恰如酷吏臨小民。不啻籍没家財、殆乎食其肉。雲
門唯抱簿弁祖(租カ)而已。幸逢堂上老人、削防火之禁、布儲水
劣(ママ)之合(令カ)。秉払上坐因而得歌曰、子(平カ)生無襴今五袴。（28オ）
　助辞隔于字体類
於〈于也。声相近也〉
歔〈欷也。出炁欷悲泣気咽而狎(抽カ)息〉
於〈歎詞也〉
噫〈恨声歎也。不寤之也〉

胡〈何也〉
嗚呼〈招呼、歎息之辞也。作於戯也〉
嗚虖〈歎所異也。嗚呼・於戯、通用之也〉
歟〈疑辞也。又難辞。通作与、執之辞也〉
于〈於也。象炁之舒。試言于則口炁兼平出也〉
悪〈不安於事之艱辞也〉
盍〈何不也〉
夫〈語端辞也。疑辞、又有所指之辞〉
諸〈辞也。別異之辞也。又疑辞也。語助也〉
也〈語之也。決辞也。凡言也〉
而〈仮借為語助又之辞、又発端之辞也〉
兮〈語有所稽也。歌辞也〉（28ウ）
則〈助辞、又然後之辞也〉
者〈別事詞也。分別隔異詞也。又語助凡為者筒（ママ）是〉
哉〈言之間隔辞也。又疑辞也。語助也〉
矣〈決辞也。已辞也〉
邪〈語未定之辞也〉
耳〈語也（ニカ）辞也。而已同也〉
焉〈何也。語助之ー、仮借為ー〉
否〈塞也。物不可以終ー。悪也。滅也〉
已〈養里反、此也。甚也。訖也。又語終辞也。矣字同意也〉
巳〈象歯反、巳也。陽炁已出陰炁已蔵也〉
己〈苟起反、己中宮也。又身也。対物而言曰彼、己作巳誤也。〉
乎〈語之余也。矣・乎・虖、同疑辞也〉
焉〈何也。語終辞、決辞也。豈也〉
只〈語也。辞毋也。止同、必也〉
是抑与〈語之助也〉
且又那凡〈説不見者也〉
烏〈ー有〉
其〈語已辞、疑辞、去声也〉（29オ）
爾而已　爾云　者也　者与　哉者
矣耳焉也〈決辞也〉
乎歟耶哉夫〈疑辞也〉

大　内封　謹上　某親〈尊前〉　姪孫　某　状封
唐　外封　〈平安宗書付拝上／某州某県姓某官〉　姪孫且位某謹重封
書　内封　謹上　某親〈尊前〉　孫〈子則之男〉　某　状封
札　外封　〈平安宗書百拝上／某州某県姓某官〉　孫　某謹重封

之　内封　書拝上　幾兄〈座前〉　　弟　　某状封（29ウ）
封　外封　〈平安宗書付拝上／某州某県姓某官〉　弟　某謹重封
遣　賀僧新枝剃祝髪、已諧宗風蓋披、伏惟、賛賀首座堂々頂相
　入清浄、自此把第蓋頭、不勝喜躍之至
答　濫膺落髪、叨獲空身、求通黄梅機関、安識丹霞了悟、只憑
　檀越、強作葫蘆、喚上禅壇知恩有自帰来答報徳無窮

〈本云〉此書先年以正本書写、雖然依回禄之災、一時焼却了、重書写之。謬舛惟多、亶侯貽誚。後来起本、但願俟博達之筆沢者也。竹渓叟良容（花押）〈判似スル也〉（30オ）
〈本云〉于茲寛永十四年臘月　日書写畢。拾遺菅判（30ウ）